

座標 : 北緯34度28分43.14秒 東経135度49分12.64秒

ウィキペディア

飛鳥寺

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

飛鳥寺（あすかでら）は、奈良県高市郡明日香村にある寺院。蘇我氏の氏寺である法興寺（仏法が興隆する寺の意）の後身である。本尊は「飛鳥大仏」と通称される釈迦如来、開基（創立者）は蘇我馬子である。山号を鳥形山（とりがたやま）と称する^[注釈]]。現在の宗派は真言宗豊山派。新西国三十三箇所第9番札所。

目次

寺号

歴史

創建

本尊の造立

平城遷都以後

寺域・伽藍

出土品

塔心礎納置品

瓦

釈迦如来像（飛鳥大仏）

文化財

重要文化財（国指定）

国の史跡

札所

アクセス

周辺

脚注

注釈

出典

参考文献

関連項目

外部リンク

寺号

飛鳥寺には複数の呼称がある。法号は「**法興寺**」または「**元興寺**」（がんこうじ）であり、平城遷都とともに今の奈良市に移った寺は「元興寺」と称する。一方、蘇我馬子が建立した法興寺中金堂跡に今も残る小寺院の公称は「**安居院**」（あんごいん）である。『日本書紀』では「法興寺」「元興寺」「飛鳥寺」などの表記が用いられている^[注釈]]^[2]。古代の寺院には「飛鳥寺」「山田寺」「岡寺」のような和風の寺号と、「法興寺」「浄土寺」「龍蓋寺」のような漢風寺号（法号）とがあるが、福山敏男は、法号の使用は天武天皇8年（679年）の「諸寺の名を定む」の命以降であるとしている^[1]。「法興」とは「仏法興隆」の意であり、隋の文帝（楊堅）が「三宝興隆の詔」を出した591年を「法興元年」と称したこととの関連も指摘されている^[2]。

本項では馬子が建立した寺院と、その法灯を継いで飛鳥に現存する寺院「安居院」とを含め「飛鳥寺」と呼称する。なお、国の**史跡**の指定名称は「飛鳥寺跡」である。

歴史

創建



所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥682

位置 北緯34度28分43.14秒 東経135度49分12.64秒

山号 鳥形山

宗派 真言宗豊山派

本尊 釈迦如来（飛鳥大仏、重要文化財）

創建年 6世紀末頃

開基 蘇我馬子

正式名 鳥形山 安居院（現在の公称）

別称 法興寺、元興寺（共に旧法号）

札所等 新西国三十三箇所第9番 聖徳太子霊跡第11番

文化財 銅造釈迦如来坐像（重要文化財）

法人番号 5150005004836 (https://www.houjin-bangou.nta.go.jp/henkorireki-johoto.html?selHouzinNo=5150005004836)



- ☒ 日本の地図を表示
- ☐ 奈良県の地図を表示
- ☐ 全て見る

飛鳥寺（法興寺）は蘇我氏の氏寺として**6世紀末**から**7世紀初頭**にかけて造営されたもので、本格的な伽藍を備えた日本最初の仏教寺院である^[3]。発願から創建に至る経緯は『日本書紀』、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（醍醐寺本『諸寺縁起集』所収、以下『元興寺縁起』という）、ならびに同縁起に引用されている「露盤銘」^[注釈 3]と「丈六光銘」^[注釈 4]に記載がある。福山敏男は、『元興寺縁起』の本文には潤色があり史料価値が劣るとする一方で、「露盤銘」は縁起本文よりも古い史料であり信頼が置けるとしている^[4]。

『日本書紀』によると、法興寺（飛鳥寺）は**用明天皇2年（587年）**に蘇我馬子が建立を発願したものである。馬子は排仏派の**物部守屋**と対立していた。馬子は守屋との戦いに際して勝利を祈念し、「諸天と大神王の奉為（おほみため）に寺塔（てら）を起立（た）てて、三宝を流通（つた）へむ」と誓願し、飛鳥の地に寺を建てることにしたという。岸俊男によると、古代の「飛鳥」の地とは、飛鳥川の右岸（東岸）の、現在の飛鳥寺境内を中心とする狭い区域を指していた^[5]。

一方、天平**19年（747年）**成立の『元興寺縁起』には発願の年は「丁未年」（**587年**）とし、発願の年自体は『書紀』と同じながら内容の異なる記載がある。『元興寺縁起』によると丁未年、三尼（善信尼、禪蔵尼、恵善尼）は百済に渡航して受戒せんと欲していたが、「百済の客」が言うには、この国（当時の日本）には尼寺のみがあって法師寺（僧寺）と僧がなかったので、法師寺を作り百済僧を招いて受戒させるべきであるという。そこで用明天皇が後の**推古天皇**と**聖徳太子**に命じて寺を建てるべき土地を検討させたという^[6]。当時の日本には、前述の三尼がおり、馬子が建てた「宅の東の仏殿」「石川の宅の仏殿」「大野丘の北の塔」などの仏教信仰施設はあったが、法師寺（僧寺）と僧はなかったとみられる^[7]。

『書紀』によれば**翌崇峻天皇元年（588年）**、百済から日本へ僧と技術者（寺工**2名**、鍤盤博士**1名**、瓦博士**4名**、画工**1名**）が派遣された^[注釈 5]。このうち、鍤盤博士とは、仏塔の屋根上の相輪などの金属製部分を担当する工人とみられる^[注釈 6]。同じ崇峻天皇元年、飛鳥の**真神原**（まかみのはら）の地にあった飛鳥衣縫造祖樹葉（あすかきぬぬいのみやつこ のおやこのは）の邸宅を壊して法興寺の造営が始められた。『書紀』の崇峻天皇**3年（590年）10月条**には「山に入りて（法興）寺の材を取る」とあり、同**5年（592年）10月条**には「大法興寺の仏堂と歩廊とを起（た）つ」とある。この「起つ」の語義については、かつては「（金堂と回廊が）完成した」の意に解釈されていたが、後述のような発掘調査や研究の進展に伴い、「起つ」は起工の意で、この年に整地工事や木材の調達が終わって本格的な造営が始まったと解釈されている^{[8][9]}。

『書紀』の推古天皇元年**正月15日（593年2月21日）**の条には「法興寺の利柱（塔の心柱）の礎の中に**仏舍利**を置く」との記事があり、翌日の**16日（2月22日）**に「利柱を建つ」とある。なお**昭和32年（1957年）**の発掘調査の結果、塔跡の地下に埋まっていた心礎（塔の心柱の礎石）に舍利容器が埋納されていたことが確認されている。ただし、舍利容器は後世に塔が焼失した際に取り出され、新しい容器を用いて再埋納されていたため、当初の状況は明らかでない^[10]。

『書紀』の推古天皇**4年（596年）11月条**に「法興寺を造り竟（おわ）りぬ」との記事がある。『書紀』は続けて、馬子の子の善徳が寺司となり、**恵慈**（高句麗僧）と**恵聡**（百済僧）の**2名**の僧が住み始めたとある。『元興寺』縁起に引く「露盤銘」にも「丙辰年十一月既（な）る」との文言があり、この丙辰年は**596年**にあたる。しかし、後述のように、飛鳥寺本尊の釈迦三尊像（鞍作止利作）の造立が発願されたのはそれから**9年後**の推古天皇**13年（605年）**、像の完成はさらに後のことで、その間、寺はあるが本尊は存在しなかったということになる。この点については研究者によってさまざまな解釈がある。毛利久は、現存の釈迦如来像（飛鳥大仏）は、推古天皇4年に渡来系の工人によって造立されたもので、推古天皇**13年**から造られ始めたのは東金堂と中金堂の本尊であったとする、二期造営説を唱えた。これとは別に、**久野健**、松木裕美らが唱えた本尊交代説もある。すなわち、蘇我馬子が所持していた弥勒石像が当初の中金堂本尊であったが、後に鞍作止利作の釈迦三尊像が本尊になったとする。この弥勒石像は**敏達天皇13年（584年）**鹿深臣（かふかのおみ）が百済から将来し、馬子が「宅の東の仏殿」に安置礼拝していたものである。久野説では、飛鳥寺中金堂跡に現存する本尊台座が石造であり、この台座が創建時から動いていないことから、その上に安置されていた仏像も石造であったと推定する。これに対し、町田甲一、大橋一章らは一期造営説を取り、中金堂本尊は交代していないとの立場を取る。この説では、推古天皇4年の「法興寺を造り竟りぬ」は、『書紀』編者が塔の完成を寺全体の完成と誤認したものとみなし、寺の中心的存在で仏舍利を祀る塔がまず完成し、他の堂宇は長い年月をかけて徐々に完成したとみる。今日では、この説が有力となっている^[11]。

飛鳥寺の伽藍については、発掘調査実施以前は四天王寺式伽藍であると考えられていたが、昭和**31～32年（1956～1957年）**の発掘調査の結果、当初の飛鳥寺は中心の五重塔を囲んで中金堂、東金堂、西金堂が建つ一塔三金堂式の伽藍であることが確認された。

本尊の造立

『書紀』によれば、推古天皇**13年（605年）**、天皇は皇太子（聖徳太子）、大臣（馬子）、諸王、諸臣に詔して、銅（あかがね）と繡（ぬいもの）の「丈六仏像各一軀」の造立を誓願し、鞍作鳥（止利）を造仏工とした。そして、これを聞いた高麗国の大興王から黄金三百両が貢上されたという。『書紀』によれば、銅と繡の「丈六仏像」は翌推古天皇**14年（606年）**完成。丈六銅像を元興寺金堂に安置しようとしたところ、像高が金堂の戸よりも高くて入らないので、戸を壊そうと相談していたところ、鞍作鳥の工夫によって、戸を壊さずに安置することができたという挿話が記述されている。一方、『元興寺縁起』に引く「丈六光銘」（「一丈六尺の仏像の光背銘」の意）には乙丑年（推古天皇**13年、605年**）に銅と繡の釈迦像と挟侍を「敬造」したとあり、造像開始の年は一致しているが、挟侍（脇侍）の存在を明記していること、大興王からの黄金が三百二十両であることなど、細部には相違がある。「丈六光銘」によれば、戊辰年（**608年**）に隋の使者**裴世清**らが来日して黄金を奉り、「明年」の己巳年（**609年**）に仏像を造り終えたという。つまり、『書紀』と「丈六光銘」とでは、銅造の本尊（飛鳥大仏）の完成年次について**3年の差**がある。福山敏男は、仏像の完成年は裴世清らの来日の「明年」であるところ、『書紀』の編者が発願の「明年」と誤認したため、このような違いが生じたものと考証した^[12]。当時の技術水準で、丈六の銅仏が1年足らずで完成するとは考えにくい点などから、福山の言うように、本尊（飛鳥大仏）の完成は**609年**とするのが通説となっている^[13]。



本堂



蘇我入鹿首塚と伝える五輪塔（飛鳥寺西方に立つ）

大化の改新による蘇我氏宗家滅亡以後も飛鳥寺は尊崇され、**天武天皇**の時代には官が作った寺院（**官寺**）と同等に扱うようにとする勅が出され^[14]、**文武天皇**の時代には**大官大寺**・**川原寺**・**薬師寺**と並ぶ「四大寺」の一とされて官寺並みに**朝廷**の保護を受けるようになった。これに関連して飛鳥寺近くの**飛鳥池遺跡**からは大量の**富本銭**が発見され、その位置づけを巡って（飛鳥寺との関係も含めて）様々な議論が行われている。飛鳥寺がこうした庇護を受けた背景には、同寺が当時の日本における仏教教学の研究機関としての機能を有した唯一の寺院であり、朝廷創建の大官大寺や薬師寺をもってこれに代わることができなかったとする説がある^[15]。また、飛鳥寺がこうした機能をもちえた背景には、唐において**玄奘**に師事して帰国した**道昭**が後に唐から持ち帰った經典の数々や弟子の学僧と共に飛鳥寺に居住したことがあったとされる^[16]。

平城遷都以後

都が**平城京**へ移るとともに飛鳥寺も現在の**奈良市**に移転し**元興寺**となった。『続日本紀』には**霊亀2年**（**716年**）に元興寺を左京六条四坊に移すとあり、**養老2年**（**718年**）条にも法興寺を新京へ移すとあって記述が重複している。このうち前者の「左京六条四坊」は大安寺の場所にあたることから、**霊亀2年**の記事は大安寺（大官大寺）の移転のことが誤記されたもので、飛鳥寺（元興寺）の移転は**養老2年**のことと考えられている^[17]。

馬子が飛鳥に建てた元の寺も存続し、本元興寺と称されたが、**建久7年**（**1196年**）に雷火で塔と金堂を焼失後、寺勢は衰えた。法隆寺僧・訓海の『太子伝玉林抄』によると、**文安4年**（**1447年**）の時点で、飛鳥寺の本尊は露坐であり、**江戸時代**にも仮堂一字があるのみであった。江戸時代の学者・**本居宣長**の『菅笠日記』には、彼が**明和9年**（**1772年**）に飛鳥を訪ねた時の様子が書かれているが、当時の飛鳥寺は「門などもなく」「かりそめなる堂」に本尊釈迦如来像が安置されるのみだったという。

現在、参道入口に立つ「飛鳥大仏」の石碑は**寛政4年**（**1792年**）のもので当時すでに「飛鳥大仏」と呼ばれていたことが分かる。現・本堂は江戸末期の**文政8年**（**1825年**）に大坂の篤志家の援助で再建されたもので、創建当時の壮大な伽藍の面影はない。しかし発掘調査の結果、現在の飛鳥寺本堂の建つ場所はまさしく馬子の建てた飛鳥寺中金堂の跡地であり、本尊の釈迦如来像（飛鳥大仏）は補修が甚だしいとはいえ飛鳥時代と同じ場所に安置されていることが分かった。

寺域・伽藍

飛鳥寺の伽藍は、往時は塔（五重塔）を中心とし、その北に中金堂、塔の東西に東金堂・西金堂が建つ、一塔三金堂式伽藍配置という方式の伽藍の配置がされていた。これらの**1塔**、**3金堂**を回廊が囲み、回廊の南正面に中門があった。講堂は回廊外の北側にあった。四天王寺式伽藍配置では講堂の左右に回廊が取り付くのに対し、飛鳥寺では仏の空間である回廊内の聖域と、僧の研鑽や生活の場である講堂その他の建物を明確に区切っていたことが窺われる。中門のすぐ南には南門があった。回廊外の西側には西門があったことも発掘調査で判明している^[18]。

塔跡は、壇上積基壇（切石を組み立てた、格の高い基壇）、階段、周囲の石敷、地下式の心礎などが残っていたが、心礎以外の礎石は残っていなかった。心礎は地下**2.7**メートルに据えられ、中央の四角い孔の東壁に舍利納入孔が設けられていた。舍利容器は**建久7年**（**1196年**）の火災後に取り出されて再埋納されており、当初の舍利容器は残っていないが、発掘調査時に玉類、金環、金銀延板、挂甲、刀子などが出土した。出土品からは、この寺が古墳時代と飛鳥時代の境界に位置することが窺える^[19]。

中金堂跡は、壇上積基壇跡が残るが、基壇上の礎石は残っていなかった。『護国寺本諸寺縁起集』によれば、中金堂は「三間四面 二階 在裳階」の建物で、身舎（内陣）の柱間が正面**3**間、側面**2**間、その周囲に庇（外陣）が廻り（建物の外側から見ると正面**5**間、側面**4**間）、重層の建物であったとみられる。裳階（もこし、本来の屋根の下に設けた屋根）は当初からあったものかどうか不明である^[20]。

東西金堂跡の基壇は下成（かせい）基壇上に玉石を並べた上成（じょうせい）基壇を築いた二重基壇で、塔・中金堂の壇上積基壇よりは格の下がるものである。二重基壇のうち上成基壇の礎石は失われ、下成基壇には小礎石が並んでいた。この小礎石がどのように用いられたかは不明であるが、深い軒の出を支えるための小柱が並んでいたものと推定される^[21]。

中門は礎石の残りがよく、正面**3**間、奥行**3**間で、法隆寺中門のような重層の門であったと推定される。奥行が深い（**3**間）のが上代寺院の中門の特色である。南門も礎石の残りがよく、正面**3**間、奥行**2**間で、切妻造の八脚門であったと推定される^[22]。

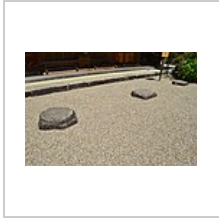
昭和**52年**（**1977年**）の調査で、寺域北限の掘立柱塼と石組の溝が検出された。昭和**57年**（**1982年**）の調査では、寺域北側を区切る塼が南方に折れ曲がる地点、すなわち、寺域の北東隅が確認された。この結果、飛鳥寺の寺域は従来推定されていたより広く、南北が**324**メートルに達することが分かった。東西の幅については、寺域北端の塼の長さは約**210**メートルであるが、この塼の東端は南方へ直角に折れるのではなく、南東方向へ鈍角に折れており、寺域は南側がやや広い台形状になっている。主要伽藍はこの寺地の中央ではなく南東寄りに建てられており、寺域の東部と北部にはさまざまな附属建物が存在したと推定される^[23]。



元興寺（奈良市）



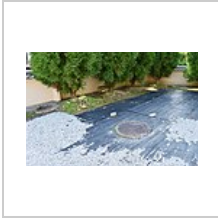
飛鳥寺（法興寺）復元図



金堂礎石



塔跡



講堂礎石（来迎寺境内）



西門跡

出土品

塔心礎納置品

『書紀』によれば推古天皇元年（593年）、飛鳥寺の塔心礎（塔の心柱の礎石）に仏舍利が埋納された。後世の仏塔では地表に心礎を据えるが、飛鳥寺の塔心礎は地下式で、大きさは東西**2.6**メートル、南北**2.4**メートルを計る。飛鳥寺の塔は建久7年（1196年）に落雷で焼失した。翌建久8年（1197年）に東大寺の僧・弁曉が記した『本元興寺塔下堀出御舍利縁起』によれば、弁曉は焼失した飛鳥寺の塔の心礎から仏舍利と荘嚴具を取り出し、再び埋納したという。これらの埋納物は、昭和32年（1957年）の発掘調査で心礎周辺から出土した。出土品には、挂甲（上古のよろいの一種）、馬鈴、刀子、玉類など、古墳の副葬品に共通するものが多い一方で、金銀の延板など奈良時代の寺院の鎮壇具に共通するものも含まれており、古墳時代と飛鳥時代の両方の特色をもっている。これら出土品は日本最古の仏塔の心礎に埋納された遺物として貴重なものである。なお、心礎の2メートルほど上方で出土した金銅製（銅に金メッキ）の舍利容器と、これを入れていたヒノキ材製の外箱は鎌倉時代の再埋納時に新たに作られたものであり、創建当初の舍利埋納状況は明らかではない。^{[24][25][26]}

塔心礎出土品を列挙すると以下のとおりである^[27]。これらは奈良文化財研究所飛鳥資料館にて保管・展示されている^[28]。

- 鉄製挂甲1領
- 蛇行状鉄器1点
- 青銅馬鈴1点
- 刀子12点
- 砥石1点
- 金銅（銅に金メッキ）製品 - 耳環23点以上、步揺146点以上、鐔付半球形金具2点、円形打出金具14点、杏葉形打出金具28点以上、鈴7点
- 玉類 - ガラス小玉、ヒスイ製勾玉、瑪瑙製勾玉、ガラス製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、銀製空玉、銀製山柵玉、赤瑪瑙製丸玉、ガラス製トンボ玉
- その他 - 金延板7点、金粒1点、銀延板5点、銀粒7点、雲母片、琥珀片、蓋石片（凝灰岩製）
- 鎌倉時代の製品 - 舍利容器、灯明皿、舍利容器外箱（檜材）

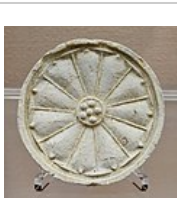
なお、塔跡出土品の再整理の際、従来材質不明とされていたものの中に真珠の小玉**14**点が含まれていることが奈良文化財研究所の調査で判明し、同研究所の**2017**年版紀要で調査結果が公表された。これらの小玉は直径**1.5**から**2**ミリメートルの微細なものであるが、穿孔されている。蛍光X線分析で主成分がカルシウムであると判明したこと、電子顕微鏡による観察で層状の構造が確認できたことから、これらの小玉は真珠であると判断された。^{[29][30]}

瓦

『書紀』によれば、崇峻元年（588年）、百済から**4**人の瓦博士が来日したことが知られる。これらの瓦博士、またはその指導を受けた工人の製作したものと思われる7世紀前半期の瓦が飛鳥寺の寺域から出土しているが、これらは瓦当（軒丸瓦の先端の円形部分）の素弁蓮華文の文様から**2**系統に分類され、それぞれ「花組」「星組」と通称されている。このうち「花組」は各弁の先端部分に小さな切り込みを入れて立体感を出している。一方、「星組」は各弁の先端部分に**1**個の珠点を表す。「花組」と「星組」の瓦は瓦当裏面の仕上げや、瓦当と丸瓦の接合方法にも差がみられる。「星組」が玉縁式（有段式）の丸瓦を用い、瓦当裏面は「なで調整」を行うのに対し、「花組」は丸瓦に行基瓦（無段式）を用い、瓦当裏面の仕上げにあまり意を用いていない。以上のことは、飛鳥寺創建期の瓦を製作した工人集団には**2**つの系統があったことを意味している。^[31]



創建期軒丸瓦（花組）
奈良文化財研究所藤原宮跡資料館展示。



創建期軒丸瓦（星組）
奈良文化財研究所藤原宮跡資料館展示。



元興寺（奈良市）本堂・
禅室屋根
屋根瓦の一部には飛鳥寺創建期の瓦が使用される。

釈迦如来像（飛鳥大仏）

飛鳥寺（安居院）の本尊で、**飛鳥大仏**の通称で知られる。1940年に重要文化財に指定されており、指定名称は「銅造釈迦如来坐像（本堂安置）1軀」である。像高は**275.2**センチメートル。

『日本書紀』『元興寺縁起』に見える、鞍作鳥（止利仏師）作の本尊像であるが、後述のとおり損傷が激しく、後世の補修を受けている。現存する像のどの部分が鞍作鳥作のオリジナルで、どの部分が後補であるかについては、後述のように諸説ある。鞍作鳥は、**法隆寺金堂本尊釈迦三尊像（623年作）**の作者であり、同三尊像の**光背銘**には「司馬鞍首止利」（しばくらつくりのおびと）と表記されている。

飛鳥寺本尊像の完成は、『日本書紀』によれば**606**年、『元興寺縁起』によれば**609**年であるが、本項の「歴史」の節で述べたように後者の**609**年完成説が定説となっている。『元興寺縁起』には脇侍像の存在を明記しており、本尊像の下方にある石造台座に両脇侍像用とみられる柄穴が残ることから、当初は法隆寺釈迦三尊像と同様の三尊形式だったはずだが両脇侍像は失われ、釈迦像も鎌倉時代の建久7年（1196年）の落雷のための火災で甚大な損害を受けている。1933年に石田茂作が調査した際の所見では、頭の上半分、左耳、右手の第2〜第4指は鑄造後に銅の表面に研磨仕上げがされており、当初のものとみられるが、体部の大部分は鑄放し（表面の仕上げがされていない）で後世のものと思われ、脚部は銅の上に粘土で衣文をつくっており、左手は木製のものを差し込んでいるという。また、像の各所に亀裂があり、亀裂の上から紙を貼って墨を塗ったところも見受けられた^[32]。



釈迦如来像（飛鳥大仏）

1973年には奈良国立文化財研究所による調査が行われたが、その結果、当初部分と考えられるのは頭部の額から下、鼻から上の部分と、右手の第2〜第4指のみだとされた。右手の第2・3・4指については、掌の部分にほぞ差しされていることがエックス線撮影によって確認されている。顔貌表現のうち、眼の輪郭線や眉から鼻梁に至る線には明らかに当初のタガネ仕上げが残っており、鍍金もわずかに残っている。頭部の下半分は造像当初から溶銅の回りきらなかった部分に象嵌や補鑄を行っていた可能性がある^[33]。本像を調査した久野健は、左の掌の一部は当初のものであるとし、左足裏と左足指の一部は焼け跡がみられることから当初のものではないかとしている^[34]。

当初部分とみられる頭部について見ると、面長の顔立ちや杏仁形（アーモンド形）の眼の表現などは現存する他の飛鳥仏に共通する表現が見られる。右手の指の表現を見ると、本像では指の関節部分を1本の刻線で表しているのに対し、法隆寺金堂釈迦如来像は同じ箇所を2本の刻線で表していることが注意される^[35]。体部のほとんどが後補であるが、その服制には古様を感じられ、焼失前の形態を踏襲している可能性がある。田邊三郎助によると、本像の大衣が左肩〜背〜右肩と回った後、体の前面を覆って再び左肩にかかる形は北魏の古像にみられ、胸の部分に內衣の襟をV字状に表す点は百済の像に例があり、その下に見える蝶結びのような紐の結び目も法隆寺の戊子年（628年）釈迦及び脇侍像などにみられる古い形式であるという^[36]。

2012年7月に早稲田大学の大橋一章らの研究チームが行った調査結果が同年10月に公表されたが、これによると現存像の大部分が造立当初のものである可能性が高いという。大橋らは、造立当初とされる部分と補修とされる部分に蛍光X線による分析を行ったが、その結果、両者の元素組成には顕著な差異は見られなかった。また、上記分析により金(Au)が検出された伝・光背断片をX線回折分析したところ、同断片が火災に遭ったことと鍍金されていたことが推測された。また鑄造専門家の調査でも銅を複数回注いだ継ぎ目の跡があり、奈良時代以前の技法としている^[37]。

大阪大学教授の藤田穰を代表者とする研究チームは、2015・2016年にあらためて本像に対する蛍光X線分析（XRF分析）、X線回折分析を行うとともに、像内の調査を行った。2017年に発表された同調査の報告書は、飛鳥大仏について、体部の大部分が後補であるとしている。同報告は、本像の面部（オリジナルが残る）と体部（大部分が後補）の金属組成に大きな差がみられないことについては、建久7年（1196年）の火災で溶けた銅を再利用した可能性があるとし、像のどの箇所がオリジナルでどの箇所が後補であるかについては、以下のように述べている^[38]。

- 面部については、従来の見解では両眼を含む上半部が当初のものとされてきたが、今回の調査の結果によればもう少し広く、頬や顎を含む下半部も当初のものとみられる^[39]。
- 頭髪部については、主に技法の観点から、肉髻（につけい、仏像の頭頂の椀状の盛り上がり）の大部分が当初作であるほか、地髪部の一部（正面髪際部の螺髪）も当初のものとみられる^[40]。
- 当初のものとする説もあつた左耳については判断を保留する^[41]。
- 右手は、第2〜第4指のみでなく、掌の上半部を含めて飛鳥時代の作とみられる。ただし、鉛の含有率が高いなど、像の他の部分とは金属組成が異なることから、本来は他の仏像に属していた手の部分を転用した可能性もある^[42]。
- 当初のものとする説もあつた左手の一部、左足裏については、今回の分析結果からは、当初のものと結論づけることはできない^[43]。

本像は創建当初に据えられた石造台座の上に安置されている。発掘調査の結果、この石造台座は創建時から動いていないことが明らかになった。石造の台座に銅造の仏像を安置するのは不自然だとして、久野健らは当初の中金堂本尊は蘇我馬子所持の石仏の弥勒像であり、それが後に本像と入れ替わったものと想定した。**1981**年の再調査で、この台座は花崗岩ではなく、竜山石（凝灰岩）製であることが分かった。また、その上の須弥座は後補と思われるが、内部に当初の竜山石（凝灰岩）製の須弥座の一部が残存していることが分かった。このことから、石造の台座は当初から銅造釈迦如来像を安置するために造られたものであり、飛鳥大仏は飛鳥時代から同じ場所に安置されていることがあらためて確認された。銅造の仏像を石造の台座上に安置したのは、銅造の重量を支えるだけの台座を銅で造る技術が当時なかったためではないかと言われている^[44]。

文化財

重要文化財（国指定）

- 銅造釈迦如来坐像（本堂安置）（彫刻） - 1940年（昭和15年）10月14日指定^[45]。

国の史跡

- 飛鳥寺跡 - 1966年（昭和41年）4月21日指定^[46]。

札所

新西国三十三箇所

客番 叡福寺 -- **9 飛鳥寺** -- 10 橘寺

聖徳太子霊跡

10 （醫王山薬田院）金剛寺 -- **11 飛鳥寺** -- 12 向原寺

アクセス

- 近鉄橿原神宮前駅より岡寺前行バス10分、飛鳥大仏バス停下車。

周辺

- 飛鳥坐神社
- 岡寺
- 石舞台古墳
- 奈良県立万葉文化館
- 国立奈良文化財研究所飛鳥資料館

脚注

注釈

- ↑ 古代の寺院には山号はなく、山号は後世付けられたものである。なお「鳥形山」は寺の北東、飛鳥坐神社（あすかにいますじんじゃ）のある山を指す。
- ↑ 用明天皇2年（587年）の蘇我馬子による建立発願の記事では「法興寺」、推古天皇14年（606年）の丈六仏完成の記事では「元興寺」と表記され、壬申の乱のあった天武天皇元年（672年）の記事中には「飛鳥寺北路」「飛鳥寺西槻」の表記がみられる。
- ↑ 「露盤」とは塔婆の屋根上にある相輪の基礎部分を指すが、古くは相輪全体を指して露盤といった。
- ↑ 「丈六光」は「丈六（一丈六尺）の仏像の光背」の意味。一丈六尺は約4.8メートルで、坐像の場合はその半分の法量を指す。詳細は法量参照。
- ↑ 『元興寺縁起』本文及び「露盤銘」にも百済からの技術者派遣についての言及があるが、技術者の人数はそれぞれ異なっている。
- ↑ 『日本書紀II』井上光貞監訳、佐伯有清・笹山晴生訳、中央公論新社〈中公クラシックス〉、2003年、320頁。ISBN 4121600584。「この歳、百済国は、使と、僧 恵総・令斤・恵窻らとを遣わし、仏の舍利を献上した。百済国は、恩率首信・德率蓋文・那率福富味身らを遣わして調をたてまつり、あわせて仏の舍利と、僧聆照律師・令威・恵衆（恵窻と同一人か）・恵宿（恵窻と同一人か）・道嚴・令開（令斤と同一人か）ら、それに寺工（寺院建築の技術者）太良未太・文賈古子、鑪盤博士（仏塔の相輪部分の鑄造技術者）将徳白昧淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・悽貴文・昔麻帝弥、画工白加を献上した」

出典

- ↑ 大脇（1989）p.12
- ↑ 浅井（1999）p.10
- ↑ 木下正史『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』（角川書店、2005）、p.19; 黒崎直『飛鳥の宮と寺』（日本史リブレット71）（山川出版社、2007）p.4、ほか諸資料

4. 大脇 (1989) p.12
5. 大脇 (1989) p.7
6. 大橋 (1996) p.133
7. 大橋 (1997) pp.135 - 136
8. 浅井 (1999) p.8
9. 大橋 (1997) pp.178 - 179, 204 - 205
10. 大脇 (1989) p.29
11. 大脇 (1989) pp.45 - 52
12. 大脇 (1989) p.41
13. 浅井 (1999) p.8
14. 『日本書紀』天武天皇9年3月条
15. 本郷真紹「古代寺院と学僧」、根本誠二 他編『奈良平安時代の〈知〉の相関』（岩田書院、2015年） ISBN 978-4-87294-889-9
16. 竹内亮「大寺制の成立と都城」『日本古代の寺院と社会』（塙書房、2016年） ISBN 978-4-8273-1280-5
17. 大脇 (1989) p.20
18. 大脇 (1989) pp.25 - 27, 36
19. 大脇 (1989) pp.28 - 30
20. 大脇 (1989) pp.31 - 32
21. 大脇 (1989) pp.33 - 34
22. 大脇 (1989) p.35 - 36
23. 大脇 (1989) p.37 - 38
24. 飛鳥寺塔心礎の埋納品（奈良文化財研究所サイト） (<https://www.nabunken.go.jp/contents/fujiwara/asuka/2-3.htm>)
25. 飛鳥資料館のみどころ(12)（奈良文化財研究所サイト） (<https://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/1243-21-8.pdf>)
26. 『飛鳥寺と飛鳥大仏解説書』 (<https://asukamura.jp/youtube/asukadera.pdf>)、明日香村・関西大学文学部考古学研究室、2013
27. http://npokokusaibunnkazai.web.fc2.com/04.html 諫早直人「舎利荘厳具から見た飛鳥寺と王興寺」（講座資料（特に資料3）、2017年2月17日、於大阪韓国文化院）、NPO法人国際文化財研究センターサイト
28. 飛鳥資料館第一展示室展示品目録 (<https://www.nabunken.go.jp/asuka/docs/20181011asukaroom>:
29. 「飛鳥寺の塔跡から真珠 仏教の七宝、創建時埋める」（産経新聞2017年7月6日）」 (<https://www.sankei.com/photo/story/news/170706/sty1707061n1.html>)
30. 田村朋美「飛鳥寺塔心礎に埋納された真珠小玉」『奈文研ニューズ』No63、p.6 (<https://repository.nabunken.go.jp/dspace/handle/11177/6230>)
31. 納谷守幸「軒丸瓦製作手法の変遷 - 飛鳥地域出土の7世紀前半代の資料を中心として - 」（『明日香村文化財調査研究紀要』第4号、明日香村教育委員会、2004（参照：[1]） (https://asukamura.jp/chosa_hokoku/kiyo/imgs/04.pdf)
32. 大脇 (1989) pp.42 - 43
33. 大脇 (1989) p.43 - 44
34. 久野 (1984) pp.49 - 52
35. 久野 (1984) p.54
36. 大脇 (1989) p.44 - 45
37. 「飛鳥大仏 ほぼ造立当初のままの可能性 文学学術院・大橋教授らがX線分析、従来の見解覆す研究成果」（早稲田大学サイト） (<https://www.waseda.jp/top/news/6373>)
38. （藤田ほか、2017）、pp.85, 97, 98
39. （藤田ほか、2017）、pp.63, 85
40. （藤田ほか、2017）、pp.63, 87
41. （藤田ほか、2017）、p.63
42. （藤田ほか、2017）、pp.63, 64, 65, 87
43. （藤田ほか、2017）、p.63
44. 大脇 (1989) p.54 - 56
45. 銅造釈迦如来坐像（本堂安置） (<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/4256>) - 国指定文化財等データベース（[文化庁](#)）
46. 飛鳥寺跡 (<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/401/2008>) - 国指定文化財等データベース（[文化庁](#)）

参考文献

- 大脇潔『飛鳥の寺』（日本の古寺美術14）、保育社、1989
- 浅井和春「新しき神の出現 飛鳥寺釈迦如来坐像」『朝日百科 日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅1』、朝日新聞社、1999
- 坪井清足『飛鳥寺』中央公論美術出版「美術文化シリーズ」、1987
- 大橋一章『飛鳥の文明開化』吉川弘文館「歴史文化ライブラリー」、1997
- 『直木孝次郎古代を語る9 飛鳥寺と法隆寺』吉川弘文館 2009
- 千田稔『飛鳥 水の王朝』中公新書 2001
- 大橋一章「飛鳥寺の発願と造営集団」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42（第3分冊）、1996（オンラインで閲覧可能[2] (http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/8502/1/80438_42.pdf))
- 久野健「飛鳥大仏論」『日本仏像彫刻史の研究』、吉川弘文館、1984（初出は『美術研究』300・301号、1976）
- 藤岡穰・犬塚将英・早川泰弘・皿井舞・三田覚之・八坂寿史・関丙賛・朴鶴洙「飛鳥寺本尊銅造釈迦如来坐像（重要文化財）調査報告」『鹿園雑集』19、奈良国立博物館、2017（参照：[3] (<https://www.narahaku.go.jp/english/archives/kiyo/19/kiyo19.pdf>))

関連項目

- 蘇我氏
- 乙巳の変
- 聖徳太子
- 元興寺
- 日本の寺院一覧
- 四合院 飛鳥式伽藍配置を中国の住宅配置と比較しその影響を指摘する説がある。

- [飛鳥光の回廊](#)

外部リンク

- [春日野奈良観光（飛鳥寺）](http://www.kasugano.com/kankou/asuka/index6.html) (<http://www.kasugano.com/kankou/asuka/index6.html>)
-

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=飛鳥寺&oldid=74080962>」から取得

最終更新 2019年9月2日 (月) 07:38 （日時は[個人設定](#)で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ [表示-継承ライセンス](#)の下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。